

# 2-6

## 訪問看護とショートステイの連携による在宅看取りの一例

本人・家族・介護に関わる者が安心して最期を迎えるために

在宅施設連携

ターミナルケア

訪問看護 こもね訪問看護リハビリステーション

看護師 伊藤 香織

副主任 与那原 貴子

東京都板橋区小茂根 4-11-11

TEL : 03-3959-7421 (代)

E-mail : houmon-kango@komonenosato.com

FAX : 03-3959-7438

URL : http://www.komonenosato.com/

今回の発表の施設  
またはサービスの  
概要

板橋区にある社会福祉法人小茂根の郷は、高齢者総合福祉施設として、地域の方々  
が住み慣れた街で快適に暮らせるよう、また地域の発展に貢献できる施設を目指し  
ている。当ステーションは法人内の一事業所として平成17年4月に開設された。

### ＜取り組んだ課題＞

当ステーションの訪問看護利用者が老衰により終末期を迎えたが、その家族が病状を受け止めきれず、また介護力不足のため在宅での看取りが困難な状況であった。一方で、入院しての積極的な治療は望んでおらず、また病院の受け入れも困難であった。

この様な状況の中で、本人が安らかにご家族が安心して終末期を迎えられる方法を検討し、施設との連携による取り組みを行ったので、今回の事例を振り返る。

### ＜具体的な取り組み＞

【事例の経過】93歳女性、長期臥床による褥瘡形成のため訪問看護を、家族の介護負担軽減のため定期的にショートステイを利用していた。

徐々に老衰が進行し、平成18年9月には食事もほとんど摂れなくなった。自宅には101歳になる夫もおり、二人を介護している息子の嫁（主介護者）は在宅介護を続けることに強い疲労と不安があった。一方で入院しての延命治療は望まなかった。訪問看護の回数を増やししながら、急変時の対応を家族と話し合った。

9月中旬に臨時のショートステイを利用するが、入所の翌日には、ほとんど経口摂取が出来ない状態となる。家族を含めサービス担当者会議を行う。家族は延命処置は望まずショートで経過を見ることを希望された。

施設ではそれまで看取りの経験が少なく職員にも不安が強かった。短期入所生活介護における在宅中重度加算（参考資料）を利用し訪問看護に関わることになった。毎日の施設への訪問により職員と利用者の状態を確認し合い、夜間の緊急連絡体制で対応した。

ショートステイ11日目に、呼吸停止し、施設の連携する医師により死亡確認された。

### ＜活動の成果と評価＞

○高齢者が在宅で終末期を迎えるにあたり、様々な状況から自宅での看取りが迎えられないケースに対し、訪問看護とショートステイが連携して看取りを迎えることができた。

○本人は重度の認知症と老衰による全身状態低下があり本人の意思を十分に確認することはできなかった。家族（介護者である長男夫婦）からは、本人の穏やかな最期の表情をみて感謝の言葉が聞かれた。

○ショートステイの職員は初めて看取りを経験したが、訪問看護との関わりの中で安心して介護することができた、看取りができてよかった、との感想が聞かれた。

### ＜今後の課題＞

○ショートステイでは自宅と違い、常に利用者本人の側に家族が居ることができない。今回は家族が終末期に近いことを受け止めきれず、ショートステイ入所後も数回面会するのみだった。本人と家族が心残りなく終末期を迎えられるよう、両者に対する精神面での支援がより重要と考える。

○在宅で終末期を迎える利用者は今後も増加すると予想され、今後一つ一つの事例を積み上げることでより良いケアの提供を目指したい。

### ＜参考資料など＞

○介護報酬の解釈 1単位数表編 平成18年4月版、  
社会保険研究所  
（短期入所生活介護における在宅中重度加算、在宅中重度者受入加算について）